



浦上春琴《浦上玉堂像》(部分) 文化10年(1813) 35歳／玉堂69歳 岡山県立美術館(浦上家伝来品)



館長のつれづれだより 浦上玉堂筆《東雲篩雪図》私見

千葉市美術館では、いまから10年前の2006年秋(11月3日～12月3日)に「浦上玉堂展」を催しています。その時は、玉堂の作品だけを展示する展覧会でしたが、今回は、子息の春琴と秋琴の作品をも含めた、玉堂父子展としました。春琴の作品は現在相当の数が遺されており、わたしも国内はもとより海外の美術館でも少なからず拝見する機会がありました。しかし、実のところ春琴の作品についての研究はほとんど進んでおらず、基準となる作品も明確になっていません。今回は、例えば、《春秋山水図屏風》(米国・ミネアポリス美術館蔵)や《魚蝦果蔬巻》など、今後春琴の代表作の位置を与えられる可能性のある作品も展示されます。わたしは、密かに春琴や秋琴の基準作探しの企画展となることを期待しているのです。

ところで、前回の玉堂展では、玉堂に関する研究集会がありました。その時、わたしは一人の聴衆として参加したのですが、議論の中心となったのは、当然のことと言えばそれまでですが、玉堂の代表作と言うに留まらず日本南画・文人画でも一際傑出すると評される《東雲篩雪図》でした。そして、画題の意味するところ、また、この図が何処で描かれたのかと言ったことなどについて、参加者の間で盛んなやり取りがあったことを記憶しています。

文豪・川端康成氏遺愛の品として夙に知られている国宝《東雲篩雪図》(川端康成記念会蔵)について小林忠前館長は、その際の展覧会図録の解説でおおよそ次のように述べています。

四字題の「東雲篩雪図」というモチーフは、日本南画の大成者として知られる池大雅の旧蔵で、のち玉堂が愛蔵するところとなった明人李楚白の画帳中の一図、「凍雲欲雪」にちなんだもので、東の字を凍に音通したもの。字義そのままに東雲すなわち早朝の雪景とする解釈もあるが妥当ではない。凍雲とは張り付いて動かない雲、あるいは冬の冷え冷えとした雲の意で、怪しいほどに墨を重ねた画面の最上部が、まさにその凍雲の広がりを示す。さらに続けて、玉堂には「作画の前に四字題を示し、その意を絵画化して同席する人たちを楽しませた節がある」。しかし、「この絵にはそのような余裕は微塵も認められない」。「深刻な自問自答の戦いのみが読みとれ」、「鬱屈する心の間を激情のままに筆墨にのせてしまったというような、玉堂画の中にあって希有な出来栄えとなっている」とされ、「すべてが凍りついてしまったかのような静寂さ」、「飛沫となって点じられた代赭の赤みが、かえって雪景の寒さ、冷たさを強調しているようだ」とも述べておられます。

研究集会のあと、小林さんに、この図はかつて訪れたことのある厳寒の地(それは会津だろうか)、雪に閉ざされ、凍てついた冬の景色。しかし、その長く厳しい冬から、一転して、春を迎えることの喜びを、その地を離れたのちに、深く心に思い描き、詩情豊かに表現したのではないかと話しました。その理由は、画中のそこそこにはね散らされた代赭色の赤にあると思えたからなのです。



vol. 80

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

[編集・発行]
〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8 TEL. 043-221-2311
FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
[発行日] 2016 年 11 月 14 日 [印 刷] 株式会社恒陽社印刷所

特集 1 「文人として生きるー
浦上玉堂と春琴・秋琴 父子の芸術」
担当学芸員に聞きました「これが文人の生きる道」
コラム「岡山よいとこ！」

特集 2 美術館の夏休み

連載 館長のつれづれだより
ボランティア日和



浦上春琴／後藤漆谷・頼春水・頼山陽賛《平安第一楼会集図》より 文化10年(1813) 春琴35歳 個人蔵

それはわたしの経験に基づくものです。1987年の春学期を、ニューヨークのコロンビア大学で過ごした時のことです。この年は、大雪の日がとりわけ多かったのですが、住んでいたアパートの窓からのぞまれる深く灰色に閉ざされたセントラルパークの森が、ある朝目覚めてみると、全体にほんのりと何処となく赤茶色に感じるのです。大学に行って、そのことを秘書に話すと「それは春が近いということです」との返事でした。そして、確かに、公園は凍てついた灰色の世界から、赤茶色の、やがて新緑の緑へと変化する季節の移り行きをわたしは実感したのです。こうした経験が玉堂にもあったのではないかと、わたしは推測します。それは中国文人の、書齋にいて胸中に浮かぶ遙か遠方の景致に遊ぶ「臥遊」の思想に近いのではないかと話しました。付け加えれば中国における四方四季の考えでは、四字題中の「東」の語は「春」を意味するのです。

「そう、面白いね。それ、美術館のニュースにでも書いてよ」と小林さんに言われましたが、その約束を果たせないままおよそ10年が経ってしまいました。いま改めてその責めを塞ごうとこの場をお借りした次第です。あくまでも仮説ですが、上記の愚見、如何でしょう？

〔館長 河合正朝〕



浦上玉堂《東雲篩雪図》川端康成記念会 国宝 (11/22～11/27 展示)

浦上玉堂と春琴・秋琴 父子の芸術

Life as *Bunjin*: the art world of Urakami Gyokudō and his sons, Shunkin and Shūkin

文人として生きる――

これが文人の生きる道

担当学芸員に聞きました！

やっぱり、おおらかというか、良いお父さんみたい感じですね(笑)話を聞いていると岡山に行きたくなります。ところで、岡山ゆかりの画家として玉堂は愛されていて、今もこの画家をめぐる豊かな人と人とのつながりが生きていて聞きましたが、今回の展覧会にも関わりがあるのでしょうか？

間もなく没後200年など記念の年に向けて、浦上家の歴史の本を編集するということで、数年前から活動や催しが精力的に行われています。家史編集のための資料やデータもお借りしたり共有したり反映されていますね。展覧会では、どこにどれだけ作品があるのか総ざらいして調べることがまず基本なので、カタログレゾネ(本)を作ろうという勢いで情報を集めることと展覧会の準備は同時進行という面もありますね。

総ざらいして、本当にいろいろなのが出て来たという感じですか？

前回展から10年。展覧会をすると、玉堂に限らずだけれど、いろいろなのが出てきます。玉堂については、若い頃の新出作品が今回の出品作でいえば多くなりました。春琴に関しては、そもそもそれまでまとまった展覧会や研究がほぼ無かったわけで、福島の展覧会*以来なので、出てくるのはみんな新しいという感じでしょう。それで、今まで知られていた春琴作品も見直すことになりました。

春琴の全貌が見えて来ましたか。秋琴は？

秋琴の絵は少ないというのは知られていたけど、少ない少ないって言い続けていたら、結構同じような絵が出て来て。70歳でリタイヤした後の作品がほとんどですが、少し若い頃の作品にも大きな収穫がありました。ただ、これらの作品がどういう意味を持つのか、ちょっと分からないところがある…。

展覧会の準備をしている間も新しい情報とか、入ってきましたか？

それはもう常に(笑)もともと、玉堂も春琴も、大名家にあるとか、寺に壮大な絵を描いていたということではなくて、個人のところにあることが多いですね。縁のある個人の家にあったものが、個人のなつきあいの間でずっと遺されてきたとか。

なるほど。やっぱり展覧会があると、ウチにもじつは…みたいな？

作品の拝借にうかがったら、出てこないかなと思っていた別の作品が床の間に掛かっていて驚き感激したりとか。所蔵が動いていることもありましたが、今回の展覧会にも関わりがあるのでしょうか？

面白いですね。古美術というか古いものは所在が決まっているという感覚が一般にはあると思うんです。

そう。「発見」って、いったいどういうことですか！？みたいなことね(笑)

そんな、とっくにどこかの美術館に入ってるでしょ！って思いますよね。

個人が大事にしているんですよ、やっぱり。別に「埃をかぶっていたのを発見」するわけではなく、大事にしたものだから、良い状態で残されている。

今回調査を通して新たに増えてきたストーリーはありますか？

父子が絡むストーリーは膨らみましたが、まとめるのは難しかったです。あんまり分からないというところもあって。例えば春琴の若い頃。玉堂と脱藩した頃までは、親子で描いてたりしたものが分かるのですが、20代が…。裏付けとなる年記のある作品が無いです。父と分かれて江戸でどうしていたのか。秋琴と3人揃って少しの間京都にいたのですが、その後はまた父は1人であちこち行くわけです。春琴も長崎に行ったりして、で、どういう決断で京都に戻ってきて、その間の足取りというか、どうしてこういう画家になってきたか作品としては見えてこない。

でも断片的でもそれが見えてきているのがすごいなと思います。もう、それこそ200年前の話が、作品をたよりに浮かび上がってくるわけじゃないですか、動きとか足取りが。それがなんかすごくドラマチックだし、面白いです。

特に春琴の方は良いと思うものには大概、誰のために、どういうシチュエーションで描いたのか、そこには誰がいて、どんな気持ちだったというようなことが、全部跋文だとか詩とかの形で添えてある。そういうものが絵としてもまた良いので、そこを読んでいくと目を追って行動まで見えてきます。こっちの作品とあっちの作品に出てきたものとが、人脈とか日にちとかでバシッと、こう、パズルみたいにはまるのが、いくつもありました。

作品の中に手がかりがあるんですね。描かれているシチュエーションとかに共感できると楽しめる、引き込まれていくのかなと思います。

実景、実体験、実際のことを文人としてのよそおいで描き表しているのも、その気持ちに寄り添えると、ひとつひとつの絵が同じではなくてくるというか(笑)同じような絵に見えるかもしれない。

その空間に自分もいる、しかもその人たちと一緒にいるという感じ。「文人として生きる」というサブタイトルがついていますけども、そこに自分も寄り添えればってことですね。ただ、文人っていう感覚が、今の人たちにどこまで理解されるか、ずっと入ってくるのかというところと気になるところで、好きな人にはわかると思うのですが、どのように近づいて行ったらいいいでしょうか。

でも、春琴なんかは、本来的な中国での意味での文人ではなくて、職業画家なわけです。文人サークル活動みたいな、文人クラブ活動みたいな、そういうのを一生懸命やっている感じですよ。日記ひとつ書くのでも、詩で書いたり。で、その詩を仲間に見せて、どうでしょう？ みたいなことをやりあったりとか。

文人として生きるということを、ある意味意図的にやっているわけですね。

そういう生活を、文人活動をするためにはお金が必要で、そのお金は一生懸命絵を描いて稼ぐわけですね。絵と文人活動は重なりもするけれど、非常に一生懸命プロの文人をやると言うんでしょうか(笑)春琴は、書画骨董、中国の文物などの鑑定もできて、眼が利いたという話ですけど、それを学んだり身の回りに置いたり体裁を整えるには資金が必要でしょう。

そういうサークルは結構人気があったんですか？

人気というのか、盛んに活動していたようです。メンバーには、それぞれの専門領域があり、医者だったり、商人だったり。富裕な商人が文人活動に参加して資金の裏付けになる。その拠点が全国にあったんだから、社会の豊かさというか、余裕ですかね。

この時代になってからですか？サークル的なことまでして文人になりたいっていうのは。

こういう雰囲気は江戸中期くらいからじゃないでしょうか。武士もいるけれど、そうでない人も



【図5】浦上春琴《春秋山水図屏風》文政4年(1821)8月 春琴43歳 ミネアポリス美術館(バークコレクション)

含めて、職業の領域を越えた結びつきができる場なんですね、文人活動というのは。俳諧とか、力点を置くところの違いはあるし、集まりには派閥もあるでしょうが、でも「友達の場合はみな友達」。で、また、その日のことを後々詩に書いて、それを看にまた次の会を催し…みたいな感じですね。

そういう集まり、今もあるかもしれません。

「月イチ誰それ会」みたいなものとか。持ち回りで幹事して、やることは色々理由付けてね。

玉堂は、晩年は春琴と同居で、面倒をみてもらっていました。それまでも書画の斡旋や、琴を作ったり、音楽面のことをやり、文人らしさが素晴らしいと言われ……。

お礼というかたちで、ごはんになったり、宿になったり(笑)

そういう文人サークルの人脈を玉堂と春琴は共有していました。春琴のキャリアの始まりや方向性にも、やっぱり玉堂の人脈というのが非常にあったと思います【図1】。これが物語っていますね。ここには、玉堂も春琴も描かれています。

象徴的な作品といえば、玉堂69歳の姿、これを春琴が描いたというところが素晴らしいわけ



【図1】浦上春琴／後藤漆谷・頼春水・頼山陽賛《平安第一集会図》文化10年(1813) 春琴35歳 個人蔵

【表紙・左】。実子が人気画家で生前の父を描いているという…肖像画としても稀な例だと思います。しかも、こんな風に良い感じに描いてくれている、この関係性。

描いているものへの親しみというか距離の近さが感じられます。

非常に尊敬されている感じがします。何かあたたい描きぶりや、こういうあり方・生き方を認めているという、春琴のまなざしを感じます。

私たちが文人に心を近づけながら作品を観てきたいと思いますが、玉堂が初めての人もいると思うので、鑑賞の手がかりを教えてください。

春琴と違って玉堂の場合、その場の状況、このとき誰がどうしたとか、そういうのとはあまり関係なく、題とした内容を描いているので、やっぱり筆の動きとかを想像して、入り込むしかないかなと思います。書道経験、筆を扱った経験を思い出しつつ、墨と筆を使ってこういう表現が生み出せるのか、ということからですかね。それがどんなふうに見えてくるか。

それに対して春琴の作品は、人間関係というかサークルの中から生まれたものと言えるでしょうか。

それがわからない絵もありますが、達者だから、簡単に描いたような花の絵とかでも、ニクイような上手さがある。子どもの時の絵も面白いです。10歳そこそこの子どものかこう描きますか！みたいな。非常に頑張っていてなかなか微笑ましい。そのそばに、こういう奔放な絵を描いていたお父さんがいたと思うと、またね(笑)玉堂は、結構教育ババです。自分は誇り高い元々は武士だけど、子どもたちはゼロになっちゃうわけだから。その生活を保障するためには、教育が必要なのです。



【図5】浦上春琴《春秋山水図屏風》文政4年(1821)8月 春琴43歳 ミネアポリス美術館(バークコレクション)



【図2】浦上玉堂・秋琴《山水画帖》より 個人蔵

文人として生きられるように。

文人として生きて行くのも大変ですね……。

教養を叩き込み、人脈を、誰のところに入門してとか、いろんなかたちを調べて、お膳立てして。春琴も、若い頃は悩んだり頑張ったと思いますね。いろんな方向があったけれど、こっちへ来た。42歳で父が没し飛躍しました。

そんな親子の姿が、見えてくる展示だと思います。最後におすすめの作品を教えてください。

若い頃の作品、この画帖【図2】はたまたま良いです。もちろん玉堂として完成された晩年のものも良いのだけれど。選べない…。玉堂の絵は、同じようだけれど意外といろんなタイプがあるんです。細かい系とか、乾いてる系【図3】とか、濡れてる系【図4】も。それから、酔っぱらい系も何

通りか(笑)。前の玉堂展の時にも、すばらしいと震えたような思い出る作品もあります。夜の展示室で、とか。

決められませんね(笑)では、春琴のとおき？ ミネアポリスからお借りした作品でしょうか。

あれは特別なものだと思います【図5】。海外なので勇気を出して借用のお願いに踏み切ったのですが、展覧会の準備が進んできても、やっぱり特別だったと思います。他にあのような屏風が無いということも分かったのですが、春琴ができることが全部、延々とつめ込まれているんです。構図も工夫され、とても立派で状態も綺麗。ただ背景が解らないから、思い入れしづらいというのはありますね。ですから、やっぱり、魅力的なのは個人的な絵。誰かの、何のために描いたという思い入れのこもっているものが良いです。

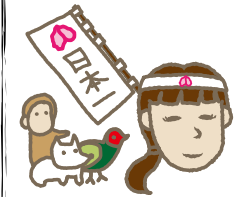
今回、初めて全貌が見えてくる春琴の作品にも是非注目したいと思います。

今回は3人の親子を巡る様々な葛藤やつながりも見て取れる展示となるようです。父・玉堂の姿が浮かび上がり、まるで大河ドラマのよう。そして、玉堂＝孤高の芸術家というイメージがどんな風にできていくのか、玉堂をめぐる人の目を結びつけた最後の章も今回ならではの展示とのこと。どうぞご期待ください。

*福島県立美術館「玉堂と春琴・秋琴」展、1994年

【話し手：担当学芸員 松尾知子】

column 岡山よいところ！



岡山会場の展示作業のときミネアポリス美術館の学芸員さんと一緒にいて、彼は日本美術が専門で、作品の価値や稀少性について、よくご存じなのです。作品がだいたい掛かったところで、掛軸の間が20センチぐらいしか開いてなくて、ダーっと並んでいるのを見て、本当にナチュラルに「Oh my Goodness！」ってつぶやいていました(笑)「どうしてこんなこと」ってね。あんな物量の玉堂や春琴を見るのは初めてだったので。キャプションを付ける前でしたけど、すごく楽しんでご覧になっていましたね。

なるほど。わお、「何これ！」って。大充実ということですね。

そう。もう二度とこんなお祭りはなろうというのか、贅沢な空間だったなって思います。あと、岡山県立美術館は玉堂が生まれた所に建っているの、縁のある所で見られたことを幸せに感じました。展覧会に関わってくださる皆様の中には、今にもつながる玉堂父子、浦上家を囲む人脈があって、深く熱い思いをもって作品を収集されています。それは木村定三氏のような大コレクター達にもつながる現象ですけれど。

私自身、展示作業をしたり、文章を校正したり、作品に向き合う機会がこの夏多かったのですが、特に玉堂は没入して観るタイプの絵だと改めて感じました。皆といる時にじゃなくて、1人で夜校正している時なんか集中して見て、ぐっと引き込まれることが多かった。心を掴む力がある絵な

んだなって、いろいろな体験を通して思ったのが、今回の感想です。

岡山の良いところを教えてください。こちらに帰って来て岡山ロスになってたじゃないですか(笑)

岡山の良いところは…まずメシが美味い！(笑)そして千葉もそうでしょうけど、気候が良くて暮らしやすい。だから、鳥取とか島根とか瀬戸内あたりの人って、ラテンというか県民性がおおらかというか、生き辛い所ではないのかなって。

皆なんとかなってる？

そう。だから最終的にはなんとかなるさ、って

感じで、こせこせしてない(笑)「そうか千葉から来たのか、岡山は良い所だ。実はこの辺が堀で……」というお話を美術館の整備員さんに伺うという一幕もあり、皆さんが地元を愛しているのが色々なところで良く分かりましたね。

ところで、おすすめの1点ってありますか？

春琴の65歳の元旦に孫を抱く「元朝口占律詩」がすごく良いので、皆さんそれを読んでください(笑)字ばかりですが、あれを素通りしたら本当に本当に勿体ない！と思います。図録のコラムに詳しく紹介されていますので、ぜひそちらも読んでみてくださいね。

【話し手：学芸員 松岡まり江】

講演会やコンサート、ワークショップなどさまざまなイベントをご用意しています。くわしくはチラシまたは当館ホームページをご覧ください。

美術館の夏休み



中学生のためのギャラリークルーズ'16

7月22日（金）、23日（土）

友達や家族と一緒に来た子どもたちに寄り添うように、当館ボランティアがつとめる鑑賞リーダーが展覧会をガイドするこの企画。参加者は展覧会にちなんだオリジナル缶バッジをつけて展示室へ向かいます。今年もたくさんの中学生が参加してくれました。一人での鑑賞も良いけれど、リーダーと共に会場をめぐること、もっと展覧会を楽しみ、理解を深めることができます。子どもたちの顔がどんどん変わっていく様子が、何よりうれしい2日間でした。



ファミリー・プログラム「こんな顔みっけ!～木の粘土でお面をつくろう～」

8月14日（日）

身の回りのものが何でも顔に見えたという河井寛次郎のエピソードにちなみ、まずは親子と一緒に美術館の中を顔探しです。「あの柱のところが顔に見えるよ」「こっちの床の模様も顔みたい!」みんな見る角度や高さを変え工夫しながら色々なところを探検。見つけた顔を今度は木の粘土でお面に仕上げていきます。時には親子で協力しあったり、また時にはお互い自分の制作に没頭したり。ビーズや木の枝、貝殻などでもデコレーションしたら、さらに魅力的でユニークなお面に。最後はみんなで作成したお面を手記に記念撮影をしました。

小学生のお仕事体験

8月25日（木）

千葉市のイベントで、市内の小学生たちが美術館へお仕事体験にやってきました。まずは普段は見られない美術館の裏側を特別に見学。その後は、学芸員になったつもりで、作品について他の人へと伝える体験をします。展示してある作品の中から、自分のイチオシを見つけていてねいにリサーチ! どんなところが面白いのか、その作品の魅力はどこなのか。言葉や絵で工夫してレポートを仕上げ、最後に発表してもらいました。



高校生プログラム「なくしもの屋」

7月27日（水）

3回目の今年は、現代美術家の武藤亜希子さんをお招きし、高校生たちと一緒に「なくしもの屋」というワークショップを体験しました。これまでに自分が「なくしたもの」の記憶を辿り、それをフェルトや糸を使って形にしています。出来上がった「なくしもの」を手にどんな思い出があるのかを語りあう時間では、参加した高校生のみなさんがお互いに真剣に耳を傾けあい、どこか大人びた表情をしていたのが印象的でした。

→「なくしもの屋」は縁日にも登場します!



美術館で縁日気分!!

8月21日（日）

回を重ねるごとに、にぎやかさを増しているこのイベント。今回は会場の装飾も大幅にグレードアップ。職場体験にやってきた中学生にも手伝ってもらったカラフルな手作り提灯や、お祭り気分を盛り上げるのぼりがいたるところに飾り付けられました。当日のブースも盛りだくさん! 新しく登場したのは、カプセル釣りやミニ陶器市、紙芝居、似顔絵コーナー。高校生プログラムと連動したワークショップ「なくしもの屋」。近隣施設の埋蔵文化財センターや千葉市科学館や千葉大学からもユニークなブースが登場。普段はレトロで落ち着いた雰囲気のさや堂ホールが、この日ばかりはお祭りの熱気と賑わいでいっぱいになりました。

〔ワークショップ担当 田口由佳〕

夏の美術館は盛り沢山だった

今年の夏、猛暑の中でもボランティア活動はバテることなく行われていたので、ここで少し紹介させていただきます。いつものギャラリートーク、鑑賞リーダー、ワークショップに加えての夏季限定メニューです。

中学生のためのギャラリークルーズ

私は団体予約で来館した美術部の生徒を案内しました。ギャラリートークに鑑賞リーダーの要素を加味。鋭い質問に冷や汗をかきながらも対話が弾みました。

はてな先生

夏休みに来館する小中高生の鑑賞を手助けする活動。昨年から試みられています。他県・他市から宿題で、親や祖父母に連れられてなど、来館理由は様々。「来て良かった」「観て面白かった」などと言ってもらえると嬉しくなります。ボランティア手作りのグッズも人気でした。

美術館で縁日気分!!

8月21日（日）「千葉の親子三代夏祭り」に合わせ、美術館1階のさや堂ホールで行われた縁日。花

輪茶之助さんによる鉛筆工の実演もあり盛況でした。紙芝居、似顔絵、カプセル釣り、プラ板などの出し物はボランティアの出番。私は当日プラ板のお手伝いをしました。プラスチック板にサインペンで絵を描いてオーブントースターで2～3分焼くと、アール不思議! 熱でぐにゃぐにゃになった途端、縮んで平たくなって、絵が定着する。プロさながらの絵を描く子供や、何度も並ぶ子供もいたりして、楽しい一時でした。

実のところ夏は私用も多く思うように参加できないのですが、ボラ仲間に助けられて感謝しています。

〔美術館ボランティア 熊谷敬子〕



8月21日（日）「美術館で縁日気分!!」入口からの様子